

地名成立起源からみた村落の持続性に関する研究 —村落空間モデルとしての町字分析を通じて—

村落 利根川 地名
防災 限界集落 持続性

1. 研究概要

1-1. 研究背景

8世紀の日本の人口は約650万人とされている¹。以後、日本の人口は21世紀初頭まで増加し、古代、中世、近世といった各時代で多くの集落が形成されてきた。では、こうした「村落が形成された時代＝成立起源」の差異は、村落の立地や形態にどのように関係しているのだろうか。古代の人びとはなぜその場所を選んだのか。近世に作られた村落は中世村落といかに関係していたのか。ひいては村落の成立起源の差異は、今日考える地域の持続的なありかたに対して、いかなる影響を及ぼしているのだろうか。

村落の成立起源と立地・形態に関する研究は、おもに考古学や日本史学、歴史地理学、民俗学分野で数多くの研究成果²が挙げられているが、それらは個別の村落を事例とした研究が大半である。遺跡や文献を史料としているため当然のことにも思えるが、「日本人がいかに生きてきたのか」という、国土利用の歴史のプロセスを知ることに適したものとはいえないだろう。そこで本研究では、「古代から現代にいたる日本国土の土地利用」という広大な時間・空間をつかまえる手段として「地名」に着目した。

「村落の成立起源」を明らかにすることはきわめて困難だが、「村落地名の成立起源」を知ることができる。地名の成立起源を手がかりに、日本国土の歴史的な土地利用のありかたを可視化することが、本研究のねらいである。

1-2. 研究の目的

そこで、本研究では以下2つの目的を設定した。
1) 地名成立起源の異なる村落の立地・形態的特性を把握すること。
2) これらの立地・形態的特性に加え、土地利用および防災性を比較検討することにより、地名成立起源と村落の持続性の関係を明らかにすること。

1-3. 研究方法—地名成立起源の判定について—

歴史的行政地名の成立起源は『角川日本地名大辞典』³に記されている。地域の分割や合併、失われた地名の比定については、以下の基準より成立起源の判定を行った。

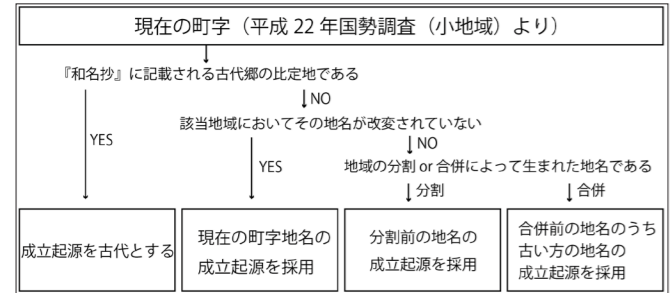


図1 地域の合併・分割、失われた地名の比定をふまえた地名成立起源の判定方法

2. 村落の成立起源と立地・形態の関連性

—木村礎「村落形態論と起源論」の立場から—

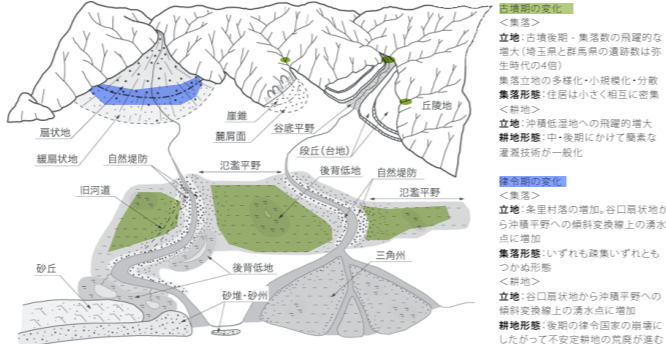


図2 古代(古墳期・律令期)における村落の立地・形態の展開

本章では、地方史・村落史を専門とした歴史学者の木村礎の既往研究⁴をもとに、各時代の村落の立地・形態の特徴を可視化した。とくに、『和名類聚抄』⁵記載郷が実在したとされる9世紀ごろの村落⁶の特徴として、この時代の郷の一般像は現在においても描かれていないと前置きしつつも、集落立地論としては「谷口扇状地から沖積平野への傾斜変遷上の湧水点に展開、集落形態論としては「疎集いずれともつかぬ形態」であるとしている。

3. 地名成立起源からみた限界集落

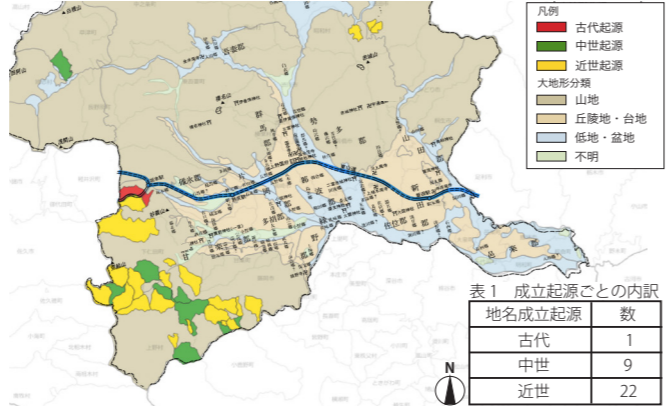


図3 群馬県の限界集落町字+地形分類図+古代地名および古代道のプロットの重ね合わせ

限界集落⁷は「過疎化などで人口の50%以上が65歳以上の高齢者になって冠婚葬祭など社会的共同生活の維持が困難になっている集落」を指す。本章では、群馬県全域を対象にし、平成22年国勢調査をもとに計32の限界集落町字⁸を抽出した。これらを地形分類図⁹、植生図¹⁰と重ね合わせた結果、以下のような特徴がみられた。
・31/32の町字が中世・近世に地名の成立起源を持つ。
・32すべての町字が山地地形に立地していた。
・31/32の町字が水田を持たず、畑面積の比率¹¹も平均8.8%と低いため、農業生産性の低い町字であると考えられた。

2015. 3..20

限界集落町字の分布と古代の地名および古代道のプロットを重ね合わせた結果、ほとんどの古代地名のプロットは山地を除く丘陵地・低地に立地していた。1つのみ抽出された地名成立起源が古代の限界集落町字は、古代道である東山道の峠の位置にあたるため、この古代郷の成立の背景には古代道の存在があると考えられた。

4. 地名成立起源からみた村落の立地特性

群馬県のうち、火山地から低地までの多様な地形分類を含むエリアとして、群馬県高崎市、安中市、富岡市、砂波郡玉村町、甘楽郡甘楽町の5市町村、計378町字を対象とし、地名成立起源による分類を行った。地形分類図との重ね合わせたところ、以下のような傾向がみられた。

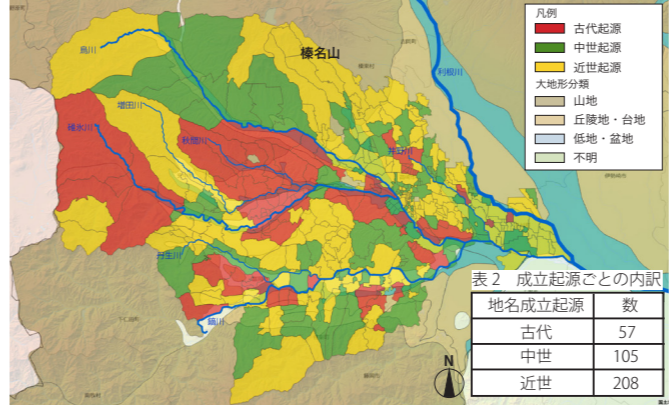


図4 地名成立起源による町字分類+地形分類図+地形図+主要河川の重ね合わせ

- ・古代: 「低地/丘陵地」にまたがって立地する町字が多い
- ・中世: 「丘陵地/山地」にまたがって立地する町字が増加
- ・近世: 「低地」「丘陵地」「山地」のみに立地する町字が増加

これらの町字立地の多様化は、丘陵地や山地、低湿地地氾濫源への村落の進出とみることができる。その要因として、水田耕作が難しい地域への水田・畑作技術の向上があったと考えられる。また木村による村落立地論「中世: 谷田の全面的開発」や「近世: 河川氾濫の開田、台地上の畑地の開発 (享保以後)」といった性質とも一致した。

5. 地名成立起源からみた町字の内部構成

町字内部の土地利用、家屋の位置に着目し、他地域においても汎用性が高いと思われる河岸段丘を中心としたエリア118町字を対象に農業生産性と防災性の分析を行った。

5-1. 農業生産性

各町字の面積に対する水田面積比、畑面積比を算出、平均値を基準に農業生産タイプの類型化を行い、成立起源ごとの割合を比較した(図5)。その結果、農業生産性の低い分類4の割合が古代起源がもっとも少ないことがわかった。分類4の割合の低さから農業生産性を評価する立場にたてば、町字を単位とした農業生産性は、古代>近世>中世の順に高くなることがわかった。

5-2. 防災性

町字域、居住域に対する土砂災害危険区域¹²との重なりを類型化、成立起源ごとの割合を比較した(図6)。

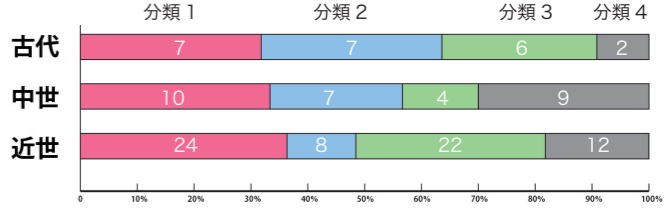


図5 地名成立起源ごとの農業生産タイプの比率(グラフの数字は町字数)
(分類1): 水田面積率、畑面積率ともに平均値を上回る
(分類2): 水田面積率が平均値を上回り、畑面積率が平均値を下回る
(分類3): 水田面積率が平均値を下回り、畑面積率が平均値を上回る
(分類4): 水田面積率、畑面積率ともに平均値を下回る

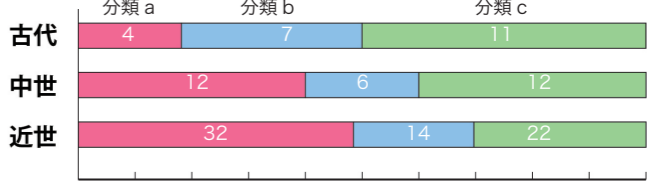


図6 土砂災害区域に対する被害タイプの比率(グラフの数字は町字数)
(分類a) 町字が災害要素と重なり、人的被害が多い
(分類b) 町字が災害要素と重なるが、人的被害が少ない(家屋10戸以下)
(分類c) 町字が災害要素と重ならない

その結果、災害要素と重なる町字の割合は、時代を下るにつれて高くなった。よって土砂災害の危険性は、近世>中世>古代の順に高くなる傾向が明瞭にみとれた。

以上より、地名成立起源を古代にもつ村落の持続性は中世、近世に比べて高いといえるだろう。その要因として、町字が「低地/丘陵地」に立地しているため、安定した耕地面積と居住地を保持し続けたことが考えられた。

6. 考察「技術」「村落立地」・「災害」の関係性

これらの結果を技術論から読み解きたい。4章で確認した「時代が下るにつれて丘陵地や山地へ進出していく立地傾向」をふまえると、われわれ日本人は、古代、中世、近世と「技術」が進歩するにつれて、丘陵地や山地、広大な低湿地を開拓し、生活や農業生産を行いうる土地を獲得してきたとみることができる。さらに第5章で確認した「土砂災害の危険性: 近世>中世>古代」という結果と合わせると、技術の進歩による村落立地の多様化は、耕作可能な範囲を押し広げたと同時に、自然災害による危険性を有するエリアにも居住地を拡大したことを示しているのではないかと考えられた。

5. 結論

地名成立起源と村落の立地形態・限界集落・土地利用・災害要素の関係を分析し、これらを通じて地名成立起源と村落の持続性の関係を明らかにした。

註1 丸頭宏、『人口から読む日本の歴史』(講談社, 2000) / 2 木村礎『日本村落史』(弘文堂, 1977) や、藤岡謙二郎『日本歴史地理総説(古代編)』(吉川弘文館, 1975)、福田アジオ『日本村落の民俗的構造』(弘文堂, 1982) など / 3 角川書店の出版による全49巻からなる日本の地名辞典。著者は『角川日本地名大辞典』編集委員会であり、1978年から1990年にかけて出版された。 / 4 『日本村落史のこころみ』(木村, 1970) および『日本における村落形態論と起源論』(同, 1977) / 5 わみよるいじゅしょう、930年代に成立。漢語に対して和名(日本での言葉)を当てることを目的に編纂された書。類書の形式で意味の説明も付される。日本に現存する最古の百科辞書でもある。写本のみ現存。 / 6 高橋大樹『千年村を起源とする町字の地形立地とその形態的特性について』(2013, 千葉大学大学院) / 7 限界集落論は社会学者の大野晃氏によって1980年末に提唱されたものであり、その諸論文は『山村環境社会学序説・現代山村の限界集落化と流域共同管理』(農文協, 2005) にまとめられている。 / 8 単一町字における町字65歳以上の総人口を町字総人口で割った値が50%を超えるものと定義した。 / 9 国土交通省が発行している20万分の1地形分類図 / 10 環境省: 自然環境保全基礎調査による第10万分の1植生図を用いた。 / 11 町字内の畑面積を町字面積で割った値。畑面積は、水田以外の生産地とみなし、「畑地」「畑地雑草群落」「桑畑」「桑園」「常緑果樹園」「落葉果樹園」「茶畑」を合算している。 / 12 国土数値情報ダウンロードサービス<災害>を利用 / 図版出典 図2: 理地研株式会社「地形分類解説」に筆者加筆、図4: 『角川日本地名大辞典』巻末資料に筆者加筆、図1、図3、図5-7は筆者作成